

ハンガリーの地方都市における日本語教育と日本文化事業の実態調査

松隈 杏梨（早稲田大学大学院生）

神 美妃（早稲田大学大学院生）

1. 活動の背景

2023 年、筆者（松隈）は所属する大学院の海外派遣プログラムに参加し、ハンガリーの首都ブダペストで日本語教育実践を行った。滞在中、現地協力者である森田友子先生と出会ったことが、本プログラムのきっかけとなった。森田先生は、ヴェスプレーム（Veszprém）という地方都市のプライベートスクール、ミネルバ・オルタナティブ教育センター（Minerva Tanulási Alternatíva、以下ミネルバ）で日本語講座を開講している。ミネルバでは小学生から社会人までのヴェスプレーム市民が日本語を学んでおり、森田先生はそれぞれの興味・関心に合わせた日本語教育を行っている。さらに、森田先生は地域の人々も対象とした日本文化に関するイベントも開催している。ハンガリーの学校教育以外での日本語教育の報告には飯野（2009）があるが、これは首都ブダペストで開講されたものである。また、飯野の報告からは時間が経っており、インターネットの発展などから海外の学習者の日本語環境は大きく変わったことが予想される。

筆者らは森田先生の日本語教育実践を知り、日本から地理的に離れた国の地方都市で、学習者たちがなぜ日本語を勉強しているのかに興味を持った。そして、森田先生が行なっているような地方都市における日本語教育の取り組みがより広く認知されることは、多くの日本語教育関係者にとって参考になるのではないかと考えた。

2. 本プロジェクトの目的・活動の概要

本プログラムでは、海外地方都市における学校教育以外での日本語教育現場の実態

を報告することを目的とする。本プログラムは 3 つの調査によって構成されている。一つ目の調査は、学習者とその保護者を調査協力者としたアンケートである。ヴェスプレームでの日本語教育の状況を日本語学習に関わる当事者および関係者の声から記述することを目的としている。二つ目の調査は、森田先生へのインタビューである。ヴェスプレームという地域における日本語教育の実態を概観することを主な目的としている。三つ目は、現地で行った森田先生との協働実践である。協働実践の報告を踏まえて、まだ広くは知られていない学校教育以外での日本語教育現場の実践および関連の取り組みについて述べる。

2-1 調査協力機関の概要

本プロジェクトで訪れたヴェスプレームは、首都ブダペストから約 110km 西、電車で 1 時間半ほどの距離に位置する。2023 年に欧州文化首都⁽¹⁾に選ばれるなど、歴史的な街並みを魅力とする都市である。



写真 1 ミネルバ・オルタナティブ教育センターの外観

主な活動フィールドであるミネルバは、

小学校の元校長先生によって開設された施設である⁽²⁾。学校の理念に賛同した個人事業主が集まり、数学、国語、化学、歴史、日本語などの講座を開講している。地域の人々が自主的に通う場となっており、日本語講座は 2018 年 9 月に始まった。2024 年 9 月現在は小学生～社会人の約 30 名が参加しており、週に 2 日、50 分の授業が計 6 コマ開講されている。

2-2 プロジェクト全体のスケジュール

渡航前の 7～8 月中旬は、森田先生とオンラインで複数回、調査と協働実践に関する打ち合わせを行なった。打ち合わせにはウェブ会議システム及びチャットツールを利用した。現地への渡航期間は 8 月 20 日から 9 月 2 日までである。渡航中はまずミネルバで授業見学を行なった。そして、協働実践として授業及びイベントを 2 日間に渡って実施した。その後、最終日にインタビュー調査を行なった。そして、帰国後はオンラインでアンケート調査を実施した。

3. ヴェスプレームの日本語教育実態調査

ヴェスプレームの日本語教育状況を知るため、実態調査としてミネルバの学習者と元学習者、保護者等へのアンケート調査、森田先生へのインタビュー調査を実施した。

3-1 アンケート調査

アンケートは Google フォームで作成し、2024 年 9 月 22 日～10 月 1 日に配布した。アンケートの集計数はミネルバで学ぶ生徒(A)12 名⁽³⁾、ミネルバの元学習者(B)3 名、保護者(C)8 名の計 23 名である。質問項目は以下の通りである。

表 1 アンケートの質問項目

【A/B/C 共通の質問】 年齢、職業、日本語学習歴、日本の学習に興味を持ったきっかけ、一週間の日本

語学習時間、日本語学習の目的

【A/B に共通の質問】

- ・ミネルバで学習を始めた理由
- ・日本語の学習で困っていること
- ・学習目的以外日本語に触れる時間
- ・日本に行ったことがあるか
- ・日本に行ったらしてみたいこと

【A のみを対象とした質問】

- ・ミネルバでの授業以外で日本語の学習
- ・ミネルバでの学習を続けている理由

【B のみを対象にした質問】

- ・日本語の学習を続けている場合の学習方法
- ・ミネルバでの学習をやめた理由

【C のみを対象とした質問】

- ・日本語学習による子どもの様子の変化
- ・保護者の日本や日本語との関わり
- ・子どもの日本語学習をどう思うか
- ・子どもの日本語学習による保護者への影響

保護者へのアンケートでは、2 つの視点から質問をした。1 つは、子どもの日本語学習に関する質問である。もう 1 つは、保護者自身と日本・日本語との関わりについての質問である。

アンケートの結果から、卒業生も含めてすべての学習者が、普段からアニメやドラマをはじめとする動画やゲーム、SNS やアプリケーションといった ICT を用いて日本語に触れていることがわかった。海外においても日本語環境は多様化しているといえる。そして、これらのコンテンツは学習ツールとしても活用されている。この結果からは、学習者一人ひとりが個別の日本語環境を構築していると考えられる。

このような状況において、ミネルバは地域唯一の対面で学ぶことができる場として、ヴェスプレームの学習者たちが共有できる日本語環境の一つとなっているといえる。「日本語は一人で学習を始めた時よくわか

らないことがたくさんあって」「最近では他にも言語学習の選択肢がたくさんありますが、教師の助けがなければ言語を学ぶことはできなかったと思います」といった回答からは、教師の存在がニーズとして示された。さらに、「グループに入ればモチベーションも上がると思った」「やる気を出してくれる」「授業後はいつも自分が上達しているのを感じます」といった回答からは、教師やほかの学習者と共に学ぶことに対するニーズと影響がうかがえた。

保護者の回答からは、子どもの学習がその保護者の興味関心にも影響があることが示された。保護者達は子どもたちの学びについて、楽しんで学んでいることを喜び、応援する姿勢を述べていた。さらに、今まで日本や日本語との関わりはなかったと回答した人が半数以上だったものの、子どもが学び始めたことをきっかけに日本に対する興味を持ち始めたという回答が複数、さらには日本への旅行を計画しているという回答や、自身も学習を始めたといった回答も見られた。

3-2 インタビュー調査

森田先生へのインタビューは現地での協働実践終了後に対面で行った。インタビュー時間は約1時間である。

ヴェスプレームでは現在、日本語が学べる教育機関はミネルバ以外にない。つまり、森田先生はヴェスプレーム唯一の日本語教育を担っている存在であるといえる。そのため、インタビューではヴェスプレームの日本語教育事情について、先生自身の日本語教育経験から辿った。以下に、インタビュー内容をまとめる。森田先生が語った内容は「」で示す。

ヴェスプレームで日本語教育が始まったのは、日本語を教えることに興味のある森田先生をパンノン大学が「受け入れて」くれたことがきっかけである。初めは日本語

教育とは関係のない業務をしながら、大学で「自分ができること」を探し、大学の関係者に相談していた。その結果、選択科目が開講されることになり、森田先生が日本語や日本文化に関わる授業を担当したという。森田先生が大学を離れた後も大学での日本語教育は続いたが、現在は学校教育での日本語教育は行われていない状況である。

ミネルバでの日本語教育は2018年に始まった。森田先生は元々日本語のクラスで、日本文化を体験できる活動を取り入れており、おにぎり作りなどを行っていた。「私が考えてたのは言葉を勉強するだけじゃなくて文化も一緒に勉強するっていうのは絶対に必要なこと。だけど授業だけでは無理でしょ？週に一回だし。もちろんやっぱりお金もいるし。」と、当時の考えを語った。そのような考えを持っていた2023年、ヴェスプレームが欧州文化首都に選ばれたことで予算が入ることになった。これまでの人と人とのつながりもあり、大規模な日本文化イベントに中心に関わることになったという。大学での日本語教師、通訳、観光のアレンジメントなどのさまざまな経験を経て、今までのつながりが現在のヴェスプレームでの全ての活動を実現させていると振り返った。森田先生にとってミネルバがどういう場所かという質問に、森田先生は「泳げる場所」と答えた。ヴェスプレームで日本語教育が行われるようになった理由、継続して現在も行われている理由は、森田先生がいるからだと言えるだろう。同時に、「完全にプライベートではできない」という語りからは、学習者、保護者、ミネルバの職員やミネルバ基金、その他の協力者らとのつながりが、ヴェスプレームでの日本語教育環境に欠かせないものであったと考えられる。

3-3 まとめ

アンケートから、ヴェスプレームの日本

語学習者はアニメや SNS などの多様なメディアを通じて日本語に触れていることが明らかになった。そして、ミネルバは対面で学べる唯一の場として、ICT を通じた学習では得られない仲間と共に学ぶ環境を提供しており、学習者のモチベーション向上に大きな役割を果たしていることもわかった。また、保護者たちは日本や日本語に対して好印象を持ち、子どもを通して日本の文化や習慣に触れていた。これは、森田先生は日本語教室の運営だけではなく、地域に向けたイベントにも携わっているからであると考えられる。実際、今回協働で実施したイベントにも子どもと一緒に参加する保護者の方々がいた。

インタビューからは、森田先生が中心となり、学習者、保護者、協力者といった日本語教育のステークホルダーたちをつないでいることが読み取れた。そして、ミネルバはヴェスプレーム及び周辺地域の住民たちが日本語や日本文化に触れることができる場として機能していることがわかった。このような場と機会は、森田先生とステークホルダーたちのつながりによって創造されているものである。

このことから、ヴェスプレームのような地方都市においては、一人の人物の存在が、その地域の日本語教育環境に大きく影響すると考えられる。森田先生を中心としたつながりが、ヴェスプレームで日本語や日本文化に触れることができる場を作っている。また、そのような対面での学びの場は、学習の機会だけではなく、実際に文化に触れられる機会が、保護者たちの興味・関心の深まりと輪の広がりにも貢献しているといえるだろう。

4. 協働実践の報告

協働実践では、普段は異なるフィールドで日本語教育実践を行っている教師同士が理念を共有した実践を協働することによっ

て、教師間のネットワークを構築することを目指した。

事前の打ち合わせで、森田先生から「和食」というテーマでのイベント開催について提案があった。そこで、主にミネルバの学習者たちが参加するイベント「Izakaya（居酒屋）」と地域の人たちも参加可能なイベント「En-Nichi（縁日）」を行なうことにした。さらに、イベントと関連付けた授業実践を計画した。

4-1 授業実践

授業実践にあたって、渡航後にまずミネルバで授業見学を行なった。そして、5 コマの授業実践を行なった。授業実践ではイベントの準備として、イベントに関連する読み物を媒介としたやり取り、イベントで使用するメニュー短冊、看板の作成を行なった。読み物は小学生・中学生クラスと高校生・社会人クラスで別のものを用意した。

イベントに関するやり取りは森田先生の協力を得て、ハンガリー語を交えながら進めた。アニメなどの影響から、祭りや居酒屋について知識を持つ学習者が多いと感じた。イベントで使用するものを作成する際は、子どもも大人も真剣に文字を確認したり、画像を検索したりして集中して取り組んでいた。ひらがな、カタカナ、漢字の復習にもなったようである。授業を通じてイベント準備に関わることで、参加者がイベントの一員であるという意識を持つことができたのではないだろうか。



写真2 授業でイベントの準備をする様子

4-2 イベントの実施

前述の通り、イベントは「Izakaya」「En-Nichi」の2つを実施した。それぞれのイベント当日は、いずれも現地協力者の森田先生によるハンガリー語の趣旨説明の後に始まった。また、撮影を得意とする学習者の一人が写真撮影に協力してくれた。

「Izakaya」は金曜日の夜に開催した。メニューは「冷ややっこ」「えだまめ」「焼き鳥」「だし巻き卵」「やみつきキャベツ」「焼きそば」「たこ焼き」「おにぎり」である。たこ焼きの型をはじめとする一部の道具や材料は日本から運び、首都のブダペストにあるアジア食品店でも買い出しを行なった。「おにぎり」は梅干か塩昆布を具材とし、一人ひとり自分たちでにぎる体験型とした。「たこ焼き」では切る前の状態のタコ足を見せ、ハンガリー語による説明をした。その上で、希望者にはたこ焼きをひっくり返す作業を体験してもらった。



写真3 Izakayaの様子

「En-Nichi」は土曜日の昼間に開催した。地域の人も参加可能なイベントであるため、事前に Facebook による告知も行われていた。「うちわ作り」「わなげ」「ヨーヨー釣り」

「スーパーボールすくい」を出店として準備した。各出店は筆者らと森田先生で担当した。なお、わなげの景品となる日本の駄菓子をはじめ、ヨーヨーやスーパーボール、ポイ、うちわなど、必要となる道具はほぼ日本から運んだ。当日の準備としては主にヨーヨー作りを学習者たちで行った。4つの遊びが体験できるチケット制とし、学習者のみならず、未就学児から大人まで地域の人たちも自由に参加できるようになっていた。それぞれの体験では、子どもはもちろん、大人も熱中していたのが印象的であった。



写真4 En-Nichiの様子

4-3 まとめ

今回の活動により、学習者と直接対話し、共にイベントを創るという現地ならではの体験を実現することができた。

例えば「En-Nichi」のうちわ作りでは、学習者から「漢字を書いてほしい」と頼まれることを予想していたが、実際には学習

者が自ら興味を持った漢字を検索したり、書いた漢字の成り立ちについて教えてくれたりした。このように、教える側と教えられる側の関係を越えた豊かな交流が実現した。

もう一つ印象的だった出来事がある。教室内では日本語の発話が必須ではなかったため、日本語をほとんど使用しない学習者も存在した。しかし、そのような学習者も、イベント時には自らの気持ちを日本語で伝えに来てくれた。このことから、体験型の活動としてのイベントは、教室活動では得られない「ことばを話したい」という欲求が自然に発生する場としての意義があったのではないかと考えられる。ことばを学ぶだけでなく、ことばを実際に使用する場として創造されることが明らかになった。

5. 得られた成果と今後に向けて

本プログラムでは、地方都市であるヴェスプレームの日本語教育の実態として、一人の教師の存在が地方の日本語環境を豊かにしているということがわかった。学校教育ではない教育現場での日本語教育は、枠組みにとらわれず、学習者に合わせて興味を深掘りする活動を可能にする。地方都市であるからこそ強いコミュニティの結びつきが、日本語教育環境の充実をもたらした。

ており、現地協力者の森田先生がコミュニティの中心的存在として学習者に「本物の日本」を伝えるために精力的に活動している。そして今回、協働実践を行なった筆者らもその日本語環境の一部になったと考えている。そして、今回の実践を通して、森田先生と日本語教師としてのネットワークが構築されたといえる。

最後に今後の展望について述べる。まず、海外地方都市に限らず、地域や学校間で格差のない支援をするための働きかけや学習者にとって必要な日本語教育とは何かについて引き続き考えていきたい。また、今回の協働実践を通じて、日本国内外を問わず、教育機関を越え、教師間で連携することによる実践の更なる可能性を感じた。そのため、今後はヴェスプレームをはじめとする他の地方都市にも目を向け、日本語教師間でネットワークを構築する機会を得ていきたい。地方都市において、学習者にとっての「日本語母語話者」の存在は貴重である。教師にとっても教育実践を共に考える存在はそれほど多くないと予想される。このつながりを継続・拡大し、日本や日本語とのつながりを感じにくい場であっても、理念を持って意欲的な実践を行う所存である。

注

- (1) 欧州文化首都とは、1985年にギリシャのメリナ・メルクーリ文化相が創設した文化プログラムで、ヨーロッパの都市が毎年選ばれる。地域住民や関係者の参加を促し、都市と周辺地域の長期的な発展に寄与することを目的としている。
- (2) 森田友子先生による2018年ハンガリー日本語教育シンポジウムでの報告ではヴェスプレームでの日本語教育の歴史、ミネルバの基本情報を知ることができる。<<https://mjot.hu/wp-content/uploads/2019/04/2018%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8%E3%80%80%E6%A3%AE%E7%94%B0%E5%8F%8B%E5%AD%90.pdf>> (2024年10月21日)
- (3) 子どもの学習者は、保護者が回答したとのことだったので、子どものデータはここに含まれていない。

参考文献

- (1)飯野令子 (2009)「日本語コースにおける教師の学習-教師の参加の深まりと日本語コースの発展-」『国際交流基金日本語教育紀要』5, pp.33-48.
- (2)国際交流基金「日本語教育 国・地域別情報 ハンガリー (2022 年度)」<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2022/hungary.html>> (2024 年 10 月 29 日)
- (3)ハンガリー日本語教師会 (Magyarországi Japánnyelv-Oktatók Társasága)「ハンガリー日本語教育シンポジウム 2018」<<https://mjot.hu/szimposium/szimposium-2018/>> (2024 年 10 月 28 日)
- (4)ミネルバ・オルタナティブ教育センターホームページ<<https://min-ta.hu/>> (2024 年 10 月 21 日)
- (5) EU・ジャパンフェスト日本委員会ホームページ<<https://www.eu-japanfest.org/>> (2024 年 10 月 29 日)
- (6)European Commission (2023) “Culture and Creativity Three new Capitals of Culture for 2023” <<https://culture.ec.europa.eu/news/three-new-capitals-of-culture-for-2023>> (2024 年 10 月 29 日)
- (7)Veszprém-Balaton 2023 European Capital of Culture ホームページ<<https://veszprembalaton2023.hu/en>> (2024 年 10 月 29 日)